

刊行にあたって

本報告書は、1988年度から1990年度にかけて実施した国立歴史民俗博物館の共同研究「日本出土鏡のデータ集成及びその共同利用に関する基礎的研究」、ならびにこの共同研究に関連して1990年度に全国の研究者の協力をえて実施した弥生・古墳時代遺跡出土鏡に関するデータ集成調査の報告書である。2分冊からなり、第1分冊（第55集）がデータ集成の準備研究ともいうべきこの共同研究によって得られた成果の一端を共同研究のメンバーに報告いただいたもの、第2分冊（第56集）が弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成である。

日本列島各地の墳墓・古墳やその他の遺跡から出土する中国鏡や、その影響をうけて日本列島で製作された鏡が、弥生・古墳時代の研究にとってきわめて重要な位置を占めるものであることは、あらためて述べるまでもなからう。それは単に日本列島の遺跡や遺物の年代決定資料として重視されるだけではなく、中国をはじめとする東アジア諸地域との具体的な交流関係や日本列島内部における政治社会の形成過程の解明などにも有効な研究資料であることは、戦後の数多くの研究が雄弁に物語っているところである。ただその研究資料としての有効性を十分に生かすためには、個々の鏡の型式学的研究の進展とともにデータの全国的な集成が不可欠である。このため過去においても何度かデータの集成が試みられた。古くは1926年に後藤守一氏がその著『漢式鏡』に収められた「本邦内地に於ける漢式鏡発掘地々名表」があり、また戦後は岡崎敬氏が1976年から1979年にかけて作成された『日本における古鏡』がある。しかしその後のデータの増加は、発掘調査の増大にも比例して膨大なものがあり、その集成は個人的に可能な作業の限界をこえたものになっている。

こうした状況から、創設当初から考古学を含む日本歴史の研究に関する研究情報の集成と研究者への提供を意図していた国立歴史民俗博物館では、日本出土鏡のデータ集成を計画し、まず研究上需要の多いと判断される弥生・古墳時代関係のデータの集成を行うことにした。ただ、弥生・古墳時代遺跡から出土する鏡については、その製作地も東アジア各地にわたり、製作年代の幅もひろく、多種多様な研究が早くから蓄積されている。またその分類や名称、製作地の判断などについても多くの意見があり、必ずしも見解が一致しているわけではない。集成されたデータの有効な共同利用

をはかるには、データの集成に先立って集成すべきデータの項目や内容、さらに鏡の分類、名称、文様、鋭文、年代、同型関係、製作地などの基本的事項について問題点を検討しておくことがどうしても必要である。こうした目的のために当館の共同研究として実施したのがこの「日本出土鏡のデータ集成及びその共同利用に関する基礎的研究」にほかならない。

したがってこの共同研究は、あくまでも出土鏡のデータ集成のための準備作業として実施したもので、特定の研究テーマの解明をめざしたものではない。この共同研究の成果は、データ集成の事業自体に集約されているのである。しかしながらこの共同研究で各メンバーが発表された報告には、日本出土鏡自体の今後の研究にとっても重要な問題を含むものが少なくなかった。そこで各研究メンバーに、この共同作業のために準備され報告願った研究の一端をまとめていただいたものが第1部の本報告書である。ただ、この報告書には館の内部メンバーの報告は掲載していない。それはこの共同研究と並行して、各地の多くの研究者の協力をえて実施したデータ集成調査の成果を、館のスタッフが個人的な研究に利用しているのではないかという誤解をさけるためにほかならない。その後も当館では、多くの研究者の協力をえて各種の考古学関係の研究情報の集成を行っており、また今後も継続して実施していく予定である。これらの情報集成には館外の数多くの研究者の協力が不可欠であるが、そのためにもデータの一般公開以前に館のスタッフが個人的にそれを利用することは、厳につつしむべきであると考えている。意のあるところをくみ取って頂ければ幸いである。

この共同研究の成果に基づき、全国各地の多くの研究者に協力をいただいて実施した弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成調査の成果は、続いて第2分冊として刊行する。このデータ集成が弥生・古墳時代研究の基礎的データとしてひろく活用されることを願ってやまない。最後になったが、こうした事業の基礎的な共同検討作業に進んでご参加いただき、多くの教示をたまわった共同研究メンバーの方々、ならびに公私とも多忙な中データ集成作業に協力いただいた方々に厚くお礼申しあげる。

1993年12月1日

共同研究「日本出土鏡のデータ集成及びその
共同利用に関する基礎的研究」研究代表者

白 石 太 一 郎